

事件報道から学ぶ (痛ましい男児水難事故)

今朝 (6月13日) の読売新聞の社会面にベタ記事ですが次のような事故事例が載っていました。

見出しは、「湖で水遊び中 小2男児死亡」という痛ましいものです。読んでみると、内容は、「12日午後1時35分頃、札幌市南区定山溪のさっぽろ湖で『子どもの姿が見えなくなった』と父親から119番があった。救急隊員らが約1時間後、心肺停止で水面に浮いていた同区藤野、小学年I君(7)を発見したが、I君は搬送先の病院で死亡が確認された。北海道札幌南署の発表によると、I君は両親、弟の4人で湖に遊びに来ていて、水遊び中に姿が見なくなったという。同署が当時の状況を調べている。」というものです。

I君は、家族で湖に遊びに来て、水遊び中に姿が見えなくなったということであり、水に溺れたものか、身体に急激な変調が生じての結果なのか不明ですが、家族としてはやりきれない思いでしょう。同年齢の孫をもつ者として身につまされる思いがします。

小生が現役のころ、郷里が同じだった某先輩は、夏季休暇で田舎に行き、故郷の懐かしい河川で泳いでいて、やはり原因は知らされていませんが、亡くなるとういう悲しい出来事がありました。昔馴染んだ川も、年月を経ると川底の形も水の流れも大きく変わっていることを教えられました。また、いわゆる同期生のA君は、赴任地の大島で磯釣りを楽しんでいるときに、突然寄せてきた大波にさらわれ、尊い命を落としてしまいました。「君子危うきに近寄らず」のことわざがありますが、命綱のようなものがなかったのか悔やまれてなりません。

これから夏場を迎え、川や海での水難事故、山での遭難事故の発生が心配されます。こうしたレジャーに伴うもののみならず、不慮の事故は我々の日常生活の中にも潜んでいます。最近話題になっているのが、駅のホームでの電車との接触による事故でしょうか。JOC(日本オリンピック委員会)の役員の方が、東京都内のある駅で亡くなった事例について、自殺なのか、過失による事故なのかについて識者の意見記事が載っていました。そこで、思わぬ事件・事故に遭わないために普段の生活で起きがちな事故・事例を挙げ、その予防策を考えてみることにしました。その筆頭はやはり交通事故でありましょう。特に留学生の場合は、自転車に乗っての事故防止が重要です。自転車利用の事故防止について箇条書きで要点を述べることにします。

- ・ ブレーキが効くかどうか、乗る前に点検を行う
- ・ 歩道通行可の所は歩道を、歩車道の区別のないところは車道の左側を走行する
- ・ 横断歩道を渡る際は、信号をきちんと守る
- ・ スマホを見ながらなどの「ながら運転」をしない
- ・ 事故に遭ってしまった場合は、軽い接触程度であっても警察への通報を行う
- ・ 現場で当事者間だけでの話し合いには応じない

・ 万が一、歩行者に衝突してしまった場合、けしてその場から立ち去らないことをしっかり守りましょう。

次に普段の生活に潜んでいる不慮の事故ですが、これはちょっとした心掛けで防げるものです。具体的な事故事例とその防止策をあげると、

- ・ 食べ物をのどに詰まらせる
(食べやすい大きさに切り分ける、口の中に食べ物を詰め込まない)
- ・ 異物を飲み込む
(幼児のいる家庭では、飲み込みやすいボタン、コインなどは幼児の手の届かないところに置く)
- ・ ベランダからの転落
(ベランダでは遊ばせない、手すりの近くに物を置かない)
- ・ 階段から転落する
(階段に不要なものを置かない、階段に手すりを付ける、しっかり下を見て歩く)
- ・ 段差につまずき転倒する
(段差があることを認識しておく、つまずき易いところを覚えておく)
- ・ 風呂場で滑る
(滑ることを考慮して慎重に足を踏み入れる)
- ・ 風呂で溺れない
(風呂の浴槽内で溺れるケースあり、飲酒の後の入浴は要注意)
- ・ 火傷(やけど)をする
(アイロンがけ、熱湯、熱い汁、コンロなどは特に注意する)

などがあります。

そのほか、注意を要する事柄としては、

- ・ 電車に接触しないように白線(黄色の線)の内側で待つ
- ・ ホームの端は歩かない
- ・ ドアや扉に手や指を挟まない
- ・ 植木の^{せんてい}剪定時に尖った枝で目をつつかない
- ・ 凍った道路で滑らない
- ・ ゴルフのプレー中、他人の打ったボールに当たらない
- ・ 踏み台を使う場合、しっかりと固定する

などがあります。

こうした不慮の事故に遭わないため、普段から身の回りの生活環境を確認し、もし危ない箇所があったとしたら、補修なり改善を図り、安心できる環境を整えておくべきです。

そして、自分自身の健康状態を可能な限りベストの状態に維持しておくこと、万が一に望まない不慮の事故に遭ってしまった場合の対処方針、即ち、自らできる応急処置、119番による救急車の要請、非常時の連絡先の確保といったことに普段から配意しておきましょう。